
雪の花

文房具定規

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の花

【Zコード】

N3089W

【作者名】

文房具定規

【あらすじ】

ある満月の夜、学生の僕は喋つたことの無い同級生と鉢合わせした。彼女は妙な雰囲気を持つ人で、ゼミの中でも異彩を放つ人物だった。

そんな彼女から不思議な人だと笑われて思わず、お前もそうだろ、と言い返したら、なぜか次の日から付きまとわれるようになってしまった。

そんな僕の町ではずいぶん前から変な噂で持ちきりになっていた。それに興味を持つ僕は噂の真偽を確かめに首を突っ込んでいた。

生きたい？

嘘ならばただの無駄で済むけれど、眞実ならば僕は、どうしたらいいんだろうか。

プロローグ（前書き）

こんな生活、きっと誰もが絶対に送りたくないです。

プロローグ

目を引いたのはただの偶然だった。

十五夜の日、僕は気紛れを起こして深夜、河原へと足を運んだ。手には月に供えるための月見団子を入れた袋がある。気まぐれだつた。ただ気まぐれに、思い付くままに、僕は月を見たいと思って家を出ていた。団子は歩く途中にあるスーパーで適当に買った。

独り暮らしでアパートを借りてる僕には、こんな放浪をしても怒る人はいない。したことは全て因果応報に自己完結させる。それが家を出た僕に課された絶対条件だつた。

だから、こんな深夜にさ迷うことを決めた僕がすること全ては僕自身が起こしたことであり、僕のみが責を負えば、それで済む問題だつた。

だからこれは、ただの偶然だつた。

たまたま河原の目に留まつた先で、たまたまそこに彼女が居たといつだけだつた。

別に何かあつたわけでもなく、何の必然もない、たまたまが重なつただけの彼女との邂逅。

「貴方も月見？」

河原へ降りる階段がある場所で、ひつそりとただ佇んでいただけの、その瞬間まで存在しか知らなかつた同級生との、「だとしたら、変わつた人ね」それが、初めての会話だつた。

誰にも見られていないと思っていたのに、それは間違いだと次日思い知られた。

「お前、昨日河原で偉枚を口説いたってのは本当なのか？」

朝、僕は一限を終えて机でこれから受ける講義の準備をしていた。そこへ隣に座ってきた僕の数少ない友人が話しがけてきた時発した最初の一言がそれだつた。

彼の名前は浅井博臣あさいひろおみ。

人当たりのよい肉体派の青年。頭はあまり良くないが、逞しくバランスのとれた体格通りに運動系にはかなり秀でている。あまり運動は得意でない僕にとっては羨ましい限りの話だ。

一応、僕の幼馴染みもある。

「……何で知ってる」

僕は机にバッグを置きながら博臣の質問を無視して問い合わせると、

「『お前の幼馴染みとあの偉枚が昨日河原で仲良く喋つてたぜ！』って、ゼミのOFF研究会の連中が騒いでたからさ、だから気になつてな」

そして博臣は苦笑いを浮かべた。彼はあまり人と関わろうとしない僕をいつも気にかけてくれている。僕はそれを鬱陶しいと思う反面、とてもありがたいとも感じている。しかし、この話題にだけはあまりいい顔はできなかつた。

「まあ確かに深夜だつたから勘違いするかもしれないけどさ……どうだろ」

「そりや、深夜に顔見知りの男女が喋つてているのを見たら噂にもなるさ。それがあの偉枚と『人形細工』透君が相手だつたら尚更な騒ぎにもなるだろ」

「……みんな暇だな」

僕はあまりの馬鹿らしさに呆れて言い放った。

そう言つなつて、と博臣が言いかけたところで授業開始のチャイムが鳴り、教授が教室に入ってきた。

偉枚の話題はそこで終わった。

*

偉枚雪華。それは昨日河原にいた女の名だ。

彼女は僕や博臣と同時期に大学に入学した生徒のこと。といっても僕がその存在を知ったのは大学に入学してから二年目の、ゼミを選ぶ時期になつてからのことだった。偉枚と偶然同じゼミになり、それから一年の間を共にし、彼女が誰とも必要最低限の会話しかしていない事にある時気づいた。

あまりゼミに積極的でない僕も似たようなものであつたが、そんな僕から見ても偉枚は異質な存在だった。

それから博臣から偉枚についての様々な話を聞いたが、正直信じられないようなものばかりだった。

いわく。

成績が常に全教科AAで、運動神経が妙に高く、いつも笑顔のくせに喋ることは滅多に無く、目を引く美人であるのに授業以外では殆ど見かける事がなく、かと思えば変なところで見かけることがある。……とか、なんとか。聞きもしていない事までも含めて、色々と並べ立ててくれた。

どの話も見て分かつた一部のこと以外は眉唾物だったが、偉枚が変な人物だとは、それだけで十分に理解できた。

だからといってそれで何かが変わったわけでもなかつたが。
それからもゼミ以外で偉枚との接点は全くなかった。だから偉枚と噂になるようなこともこれまで一度たりともなかつた。

それがたまたま出会つた昨日、よりもよつて同じゼミの人間にその現場を見られてしまうとは思いもしなかつた。

世間は狭い。

だけど分からない。

そんな噂をなぜJFOの研究会が流せたのか。どうして深夜あんな河原に来ていたのだろうか。

どうしてなのだろうか。

授業が終わつたといひで僕は沸いて出した疑問を博臣にぶつけてみた。

「そいつらがそんな時間に居たのはJFOを呼ぶためだつてよ」「暇なのか。どいつもこいつもやうひ。

「月見を行つたお前もずいぶんどだと思つけどな。つかそつだ、俺も聞きたいことがあんだけどさ」

「うん~」

「お前どうして河原に行ひと愈つたんだよ。そいつた行事なんてお前興味ないだろ?」

「ただの気まぐれ」

「……は?」

「なにや?」

「……ふふ……はは、気まぐれ? お前が? ふふふ、ははははは

は

何だか分からぬ笑い声をあげる博臣。その声質はとても不愉快だつた。

「おいおい、冗談はよせよ。操り人形みたいに人任せしかできないお前が氣まぐれを起こした? この十数年したこと無い自發的なことをお前がしたつてのかよ。それって本気? おお、マジなのか。へえ、珍しいこともあつたもんだ。……いや、それともあれか……?

「?」

「ん?」

「お前まさか、例の噂が気になつたとか……そいつことか?」

「……」

JFの男はさうじてこちらに鋭力を持ち合わせてくるのだろうか。

「何だ、図星か？まあお前の勝手だから俺は特に気にしないけどさ。大概にしどけよ。そういうの」

「別に……言われるまでもないよ」

はながら分かっていることを言わされて僕は少しひねた口調で答えた。博臣はそんな僕を見て肩をすくめると唐突に話題を変えてきた。

「で、や。」の際どうなんだよ

「は？」

「だから偉枚のこと。口説いたのか？成功したのか？会話はしたんだろう？そこそこ詳しくな？馴染み」
博臣は何かを期待するような語感で重ね重ね訊いてきた。何を期待しているのかは知らないけれども。

「……口説いてない

「やつぱそうか

「だから成功もない

「おうおつ。」で？」

「……」

信じりよ。親友。

「おい、どこ行くんだよ」

「静かなところ」僕は教室から出ていった。

*

気まぐれであったのは嘘ではない。

ただ、その気まぐれに他意がなかつたというのに話弊があるのは間違いない。

無意識のきっかけ。

僕の奥底にあつた、期待していたもの。

「……」

もつともそれは、彼女と会つてしまつた時点で諦めていたことだつた。

あの瞬間にもう、その期待はなかつたに等しいのだ。

偉枚雪華。

河原で僕と会話した女。

*

本屋で情報誌を読みながら僕は、ふと昨日の出来事を思い返していた。

月を見に行つた僕を、変わつた人と呼んだ女。

しかしそれは、そう言つ彼女だつて同じだ。偉枚だつて、月を見に行つていた。貴方もと言つていた彼女から、それは十分に読み取れる。

だから僕は、思わずらしくもなく、

「君だつて変わつてゐる」

と言い返していた。

本当に僕らしくない、波風を立ててしまつような発言だつた。なぜそう言つてしまつたのかは自分でも分からぬ。

よく周りから人形と揶揄されてきた僕にとって、変わつていう言葉は珍しくもない。なのに偉枚に言われたときに、お前にだけは言われたくない、咄嗟に思つてしまつていた。似たような人間だと思つていたからだらうか。

おこがましくも、自分と相手を。

「…………いや

今さら、後悔したところで仕方がないことだ。言つてしまつた事実は変わらないし、今となつてはどうでもいいことでもある。

それよりも、今向けるべきは今後の自分の身の振り方だ。

UFO研。

彼らには静かに平穩に暮らしたいという僕の気持ちを汲んでもらいたい。

今度博臣に、噂を流した奴に炎を据えておくれよつこでも頼んでおこうか。

ただでさえ嫌なゼミが、そいつらのせいでさういひになってしまった。

彼らが河原にいたというのは別に構わない。

ただ、河原で月を見上げながら、ポツポツ会話をしていた僕らを見ただけで、口説くとか、そんな厄介なものに結びつけるその思考が始ま末におえない。

僕たちはそんな関係じゃない。

あの場においてはただ互いに伸びる自分の歩く線がたまたま交差しただけであつて、複雑に絡まつてしまわないことにはそんなことは一度起きはしない。

僕はわきまえたし、偉枚だつてきつとその程度で済ませているはずだ。

もう僕とは無縁なことだ。

だからまあ、いい。昨日は僕が軽率だつた。それでいい。深く考えるべきじゃない。UFO研については博臣に任せて終わり。これ以上は泥沼だ。

人の噂は七十五日といつ。

新しい話題が来れば早々に忘れ去られるということ。特に僕のような影の薄い奴はさらに著しいだろう。人形の行き先なんて、誰も追いかけたりはしない。

噂は日々更新されるものであり、広まりやすければまた、消えていくのも早いものだ。

だからいつか、町にはびこる噂も、消えていくのだなつ。きつと。

僕は手元の雑誌に目を落とした。

『滅びは実話！？ 日本は沈む？』

『都市にはびこる噂、それは真か偽りか！？』

「……」

いつの頃からだらうか。僕たちの国には滅びの噂が流れていた。

満月の夜に、日本は滅ぶ。

どこからか生まれたその噂は、本当かどうかも分からぬのに入
々の中に根強く残ってしまっている。

信じている人はそれほどいない。
信じてない人もそれほどいない。

所詮は噂。ただの噂。

でもそれぞれは、少なからずいるといつ。

とは言つても、かつて何度かメディアで特集が組まれたことがあ
つたそれは深く町中に浸透はしたが、今はマイナーな雑誌で時おり
触れられることがしかなくなっている。

噂は伝説に、都市伝説のようなものになった。

しょせんは一過性の話題の一つとしてしか捉えていなかつた。
いつかは忘れ去られる存在。それに食いつき続けるのは極一部。
僕のような、一部だけだつた。

「これ下さい」

小声で噂話に興じていた受付のお姉さんにその本を渡し、マニユ
アル通りの返事を返され、僕は雑誌を受け取つた。

「有難う御座いました」

どうもと軽く会釈して、僕は店を後にした。

さて、どうしようか。

買った雑誌を小脇に抱えてから考える。

今日の僕の日程は一限と五限だけだ。今一时限目が終わつたばかり
だから、あと一时限分の暇がある。

当時の僕は何を考えてこんな微妙な時間割を立てたのか。今の僕
には分からぬ。

少々昔の自分に殺意が沸いた。

苛々することが起きたばかりのせいか、またしても僕らしくない
考え方だつた。

「パソ同行こうかな」

この時間なら暇潰しに絶好な相手もいる。

そうと決まればと僕はその場所に向かつて歩き出した。

「おーい、いるか？」

ガラガラと扉を開けながら中にいつもいる女に話しかけた。返事はなかつた。

だが、人はいた。

山のように積まれた資料の中、数台あるパソコンの中で最も薄いのを前にして、何かを一心不乱に打ち込んでいる。

中々に狂気を感じられる光景だつた。

「……まあ、元気そうで何よりだけどわ」

僕は右手人差し指で頬をかきながら溜め息を吐き、ゆっくりと女の側に寄る。

「かちかたかたかたかちかちかちかちかちかちかちかち」

狂氣そのものだつた。

そいつは、僕の存在を欠片も感じていないようで、同じような言葉を繰り返し呟き力タカタと一心不乱にキーを叩いていた。

よく見ると女の耳にはイヤホンがくつついていた。

成程、それなら気付くわけがない、と僕は納得した。

「……」

どうしようか。

話しかけたいのは山々だが、この状態でいきなり話しかけても、思わぬことには催涙スプレーを吹きかけて対処してから考えるようなこいつのことだ。迂闊な行動はできない。またそんな二の舞をこらむるほど僕は馬鹿ではない。

ガタンと僕は側の椅子を引き寄せ座り、パソコンを起動させた。彼女が気付くまでのんびりネットサーフィンでもすることにした。幸いにして、僕には時間が余りある。

さて、どこのサイトに入ろうか。

「あれ？ 透君じゃないですか。いつの間に来てたんですか？」

点けたパソコンをシャットダウンさせる。

パソコンを終了しますとパソコンは自分が眠りにつく合図をして

くれた。

おお、喋るように出来たんだ、と少し感心した。

「あれー？ 確か透君はこの時間授業があつたと思ってたんですが、はて私の記憶違いですか？」

「それは前学期の話だろ。ちゃんと言つたのにまだ覚えてないのか」呆れ声を出すと、女はパンと両手を合わせた。

「ああ、成程成程、そうでしたそうでした。ふふ、すいません。私、一度覚えてしまったことは中々修正効かないんですね。でもどうです？ いつそ私と一緒に生きてくれると約束してくれれば修正できるかもりせませんけど？」

「覚えなくて結構です」

「相変わらずつれない人ですねえ」

彼女はへラへラと笑い、右中指で眼鏡の中心を少しづらした。

彼女の名は橘姫織。

滅びの噂を探つてゐるうちにどこからか現れ、よく話すようになつた、やけにずれた性格のみようちきりんな女。

どういうわけなのか、なぜか橘は初めて会つた時から僕を知つていた。

私みたいな人がいるなんて変な人もいたもんです、と、初めて会つた時に橘はそう笑つて言つた。橘もまた、滅びの噂の真偽を確かめようとしている人間だった。

僕のことどこで知つたのかは聞いても教えてくれなかつたが、きつと噂を調べるその過程で知つたのだろうと、勝手に考えている。そう考えなければ氣味が悪かつた。

本当なら僕はこういう気質な人は苦手だ。だけど滅びの真偽を確かめるためには一人では限界がある。

橘には僕にはない情報収集能力がある。それは僕にとつて必要な力だった。

だから僕は、滅びの情報が欲しいとき大体ここに来るようにしている。

「橘、言つとくが僕はお前とそういう関係を築きたくてお前の口車に乗つたわけじゃないぞ。あくまで同じ目的だから共同戦線を張つただけだ」

「いいじやないですか、減るもんじやなし。一緒に愛の巣を育みましょうよ透君」

「お前との関係は協力者だつて言つてるだろ。噂の真偽がどうなのが、それを得るための」

「分かつてますよ、たく。またつれない人。私とんだピエロですよね。ザクザクと私の心突き刺されです。なんですか、そんなことして楽しいですか？ 爆笑必至ですか？ 抱腹絶倒ですか？ 自分は大した情報持つてこようとはしないくせに」

「その代わりに、お前の手足となつて動くと約束しただろ。持ちつ持たれつ。そういう関係にならうと最初に言つたのはお前だろ」「ええ、確かにそう言いましたよ。でもそこはケースバイケースつてのがありますね。透君、しつかりしてくださいよ。透君はそんなのくらい理解してもらわないと。何か言わなきゃやつてくれないそこらの人種と貴方は違つんですから。あまり私を失望させないでくださいよ」

「分かつた、分かつた」

「ならないんですけどね」

橘は僕の答えに満足したのか、笑顔を浮かべて偉そうに頷いた。

実は橘、この言い方から分かる通り、こうみえてかなりの人嫌いである。

橘に声を掛けられた翌日に博臣に訊いてみたところ、橘姫織という人間はかなりの変わり者であるという話を聞くことができた。

橘は気に入つた人間と話す時はやたら明るく威勢がいいが、気に入らない人間が相手だと徹底的にまで拒絶するようなタイプらしい。何がどうしてなのか、そんな気難しい気性を持つ女に、僕は目を

掛けられてしまつてゐる。

あまり波風を立てるのは好きじゃない僕にとっては厄介な話ではある。が、橘に関しては実はそこらへんを気にする必要のない唯一の相手であつたりする。

なぜならこの女は、波風を広げられる人間関係を持つてない。自分さえよければそれで良いとする非常に付き合いづらい女のため、同学生たちからはほぼ避けられてしまつてゐるのだ。

僕を噂にすらなれない影無しと例えるなら、橘は噂すら逃げ出す腫れ物扱いな人格破綻者だ。

そんなわけで、言つてしまえば橘は一々何かを気にする必要が全くない相手であり、僕にとつては非常に不本意だが、博臣以外に何の気なしに相手をできるのは誰だと訊かれれば、迷わずこの女の名をあげることだろう。

「はあ、全く。私の愛する透君。私の気持ちとこうのをいつ理解してくれるのやら。透君にはどれだけ私が期待しているのか理解してもらいたいです。私のこの溢れんばかりの心が一字一句間違いなく透君に伝われば、きっとあまりの感動に涙を流すことでしょう」「いや、多分引くと思う」

「あらん酷い、ぐすぐす」

「いい歳をして泣き真似をするな」

「ああ、もう酷い。もう、透君は私が嫌いなんですか？ 嫌いだつて言つなら今日は一体何をしに来たんですか？ あ、もしかして今優越感漫つてます？ 私が苦しむ様見て楽しんじゃつてますか透君。くう、なんて変態。でも、そこがまた憧れる」

「……」

相変わらず氣味の悪い女だ。

「で、透君は今日何しに来たんです？」

泣き真似を止めた後、姫織は今までとつて変わつた愉しげな口調になりながらそう訊いてきた。

「ここに来たつて事はまた滅びの噂を調べに来たんでしょうけど、

まだ透君に知らせるべき情報は仕入れてませんよ？ それとも何か調べたいことでもできましたか？ どうします？ やつちやりますか？ いらっしゃりましょよ

はしゃぐように橘は言い、側の椅子をぐるぐる回した。用事がないけど暇だから来たとは言いづらい空気が流れ始めたが、僕がそんなこと気にするわけがない。

「これ」

雑談の口火にと僕は持っていた雑誌を机の上に置いた。

「……ああ、これですか」 彼女はその雑誌を手に取った。愉しげだった表情は一転した。

「また透君は随分つまらないものを話の肴に持つてきましたね。こんな三流雑誌じゃ大した話もないじゃないですか」

橘は不満そうに口を尖らせた。

「文句言うなよ。今となつちゃこの噂扱つてくれるのなんて、そんなんしかないんだから」

「こんなもの……パソコンですぐ当たるのに」

橘は口を尖らせてパラパラと雑に雑誌をめくつた。

「まあ折角透君が持つてきてくれたんですから読みますけど……面白くないことしかやつぱり書いてないですけど。でも、いいでしょう。透君の労力に免じて参考文献には加えておきます。滅びの噂、霞みみたいに分からぬことだらけですから。ふう、ああ、早く知りたいこの噂。この真実」

「……」

また自分の世界に入つたかこの女は。

「橘、お前はこの噂を知つて一体何がしたいんだ」

「はい？」

「こんなの知つたところで何か得をするわけもないし、仮にこれが真実だとしてどうにかできるわけでもない。嘘であればそれ以前に徒労だ。それでもお前はどうして知りたがる？」

「私は気まぐれで動いてるだけですよ？」

「気まぐれ？」

キヨトンとした表情を浮かべる橘の言葉に僕は肩透かしを食らつた気分だった。

「たつた、それだけか」

「む？ 妙に引っ掛かる言い方しますね透君。じゃあ逆に問いましょうか。透君は何でこんな徒労にその首を突つ込むんですか？ 貴方だって、その無駄なことをしようとしている一人でしょ？」「それは…… そうだけど」

「変な透君。どうしたんですか血迷つて」

「いや、お前つてなんか無駄なこととか嫌うような人間に見えたから、ちょっとと意外だつた」

「気まぐれと無駄は違いますよ透君。気まぐれは人が誰しも起こす行動です。操り人形透君には分からんのですかね？」

「……僕だって、あるさ」

「おや、あるんですか。へえ、それこそ私にとつては意外ですけどね。ちなみにどんな気まぐれ起こしたんですか？」

「……月見」

「くあ、ふつははははは」

「……」

大声で笑いやがつた。

「いやあ、さすが透君。私の斜め上の行動をあつさりますね。はは。月見。かぐや姫でも探してたんですか、はは」

「……」

つい。

「あいたつ。な、何しますか透君。女の子に手をあげるなんて紳士の風上にも置けないですよ！」

「生憎人形なんで」

「さいつてえええ。こんな時だけ逃げ口上にそれ使うなんて。貴方絶対良い死に方しませんからねつ」

「好きに言え」

「ふつきらぼうに僕はそう言つた。

そこで不意にさつきまで橘のしていたことが頭に浮かんだ。

「橘

「何ですか人畜」

「そういうえばさつき力タカタと無心にキーボード叩いてたみたいだけど、一体何やつてたんだ?」「唐突に橘の体が硬直した。

「……」

はて、僕は今何かおかしなこと言つたか?

「あ……ああ……あ……つ」「

「……おい、橘?」

「忘れてたあああああつ……！」

突然橘はそう絶叫したかと思つと、慌てた様子で今まで開きっぱなしになつていたデイスプレイに身体を向けて様々な文字列を打ち込み始めた。

「……なにやつてんだ?」 状況がよく分からぬ僕はそう問いかけると、橘はさつきより遙かに早いキータッチをしながらこう返してきた。「今日提出の課題まだ終わつてなかつたのをすつかり失念してたんですよ! 今日出さないと留年確定のヤツつ。あああ! 透君の突然のご来訪にすつかり舞い上がり上がってこんな初步的なミスを私としたことがあつ!」

「……」

何が何やら。

「なあ、橘。その課題つてどのくらいあるんだ?」

「326ページです!…!」

「……」

そんな半端のない量の課題が近日中に出されたとは到底思えない。

「重ねて悪いが橘、それつていつから期限設定された?」「九ヶ月前からですよ!…!」

九ヶ月前。

九ヶ月前？

「……なあ」

「はいっ！？」

「それだけの時間がありながらなんで出来てないんだ？ お前なら課題なんて三日程度で……」

「ずっと遊んでました」

「……」

馬鹿がいた。

「……邪魔になるようだから僕は失礼するよ」

「じゃ、これでと言つて僕は席を立つた。

「ああ！？ 見捨てるんですか！？ こんなにも苦しんでる美少女を目の前にして透君は見捨てるんですか！？ 酷い！ 薄情者！」

「頑張れ」

僕は部屋の扉を開けた。

「見捨てた！？ 見捨てましたか今透君！？ 助けてくださいよ透！ 透君！ ああっ、本当に行くつもり？ 透君！ もうっ、馬鹿あつ！」

ガチャリと静かに僕は戸を開めた。

さて、では時間潰しに図書館へ行こう。

「あ、透君」

「うわっ」

閉めたばかりの扉がわずかに開き、橘が隙間から顔を出した。思わぬことに口からは勝手に戸惑いが飛び出していた。

「うわっとは何ですか。うわっとは」

「うわー。まさか出でくるとは思わなかつたんだ。それより何だよ。課題は手伝わないぞ」

「分かつてますよ。ただ友達として忠告しそうかと思いましてね」

「忠告？」

「ええ。透君？ あんまり所構わぬ男女でいちゃつくのは透君のキャラじやないですよ？」

「…………」

「……っ！？」

言いたいことはそれだけです、と橘は最後に気味悪い笑顔を見せ
て部屋に引っ込んだ。

残された僕はどうしたらUFO研を地獄に叩き落とし、廃部に持
ち込めるかを本気で考え始めていた。

変わってる、か。そうね、確かに私は変わってるかもしれない。
ううん、あ、そつか。私、変わってるんだ。

怪訝な顔しないでよ。私、人からそう言われたの、初めてだから
ちょっと新鮮だったの。

でもそつか。変わってる、か。うん、私は変わっているんだ。

私はね、優しく風が吹いてる夜に外へ出るのが好きなんだ。
切なくて寂しげで肌寒いけど、でも柔らかく包み込んでくれてる
ようなこの澄んだ空気が気に入ってるの。

一番好きなのは、春に一本だけある桜の木の下でその空気の中、
風で花びらが散つていいくのを見つめて月を見上げるの。
次の春に見てみたいいよ。とても幻想的で忘れられない思い出
になるだろうから。

ふふ、気の持ちようだつていいじゃない。

少しでもそれが記憶に残るものになれば、それは何よりも素晴らしい
宝なんだよ。

貴方にだつてあるはずよ。

色褪せない、大切なものが、きっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3089w/>

雪の花

2011年10月8日03時28分発行